Ⅱ．研究報告

オレゴン州立大学における統合的な学生支援サービス
－施設見学、参加したミーティングの報告－

足立　由美

1．はじめに

筆者は、サバティカル研修期間中の 2016 年 8 月 21 日から 9 月 18 日まで、4 週間オレゴン州立大学（以下 OSU）に visiting scholar（客員研究員）として在籍し、調査をする機会に恵まれた。OSU の訪問調査は、Student Health Services（SHS ≒保健管理センター）の Excecutive Director（事務局長）である Jennifer Haubenreiser 氏のご厚意で実現した。本稿では、施設見学、参加したミーティングの内容を中心に報告する。

2．調査のスケジュール

事前調査として SHS のウェブサイトに目を通していた [1]。非常に多くの内容が記載されており、また Staff Directory に 100 人も登録されており、かなり大きな組織であると予想されるが、全体像の把握や調査の的を絞ることは難しかった。

渡米後 1 週目は Jennifer さんがセッティングした関係者との面会やミーティングに参加した。2 週目に各担当者への共通質問を考え、英語にし、1 週目に名刺交換した関係者にメールを送信した。2、3 週目は指定の場所に出かけて、アポイントメントがとれた人にインタビュー調査を行った。4 週目は秋学期開始直前であったので、新入生オリエンテーション、SHS のスタッフ研修に参加させてもらい、観察を行った。

3．オレゴン州立大学の概要

OSU はポートランド国際空港から車で約 1 時間半のアメリカ合衆国オレゴン州コーバリス市にある州立総合大学である。キャンパスの面積は約 1.7km^2 で、在籍学生数はオンラインの学生を含めると合計約 3 万 592 人である [2]。

4．Student Health Services（SHS）

Plageman という T 字型の 3 階建ての建物全館が SHS の本部である（図 1、2）。Tebeau Hall と Dixon Recreation Center に satellite clinic（サテライト診療所）がある。1 階は Medical Lab や、産業医学看護師の部屋、施設・管理、referral（紹介）などの事務的な部屋や、台所などがある。受付は 2 階で、ナースステーション（図 3）や、各

図 1　Student Health Services(SHS)正面玄関

図 2　SHS 入口 2（SHS・1 階）

種処置室、内科医の個室兼処置室がある（図 4）。3 階は Excecutive Director、その秘書の部屋、研修室があり（図 5）、Prevention, Advocacy & Wellness(PAW：予防を目的とした Workshop を行う）のスタッフの部屋、Survivor Advocacy & Resouce Center(SARC)の部屋、Graduate Assistant（GA）の居室、Nurse Practitioner（一定レベルの診断や治療などを行うことが許されている看護師）や精神科医の部屋（図 6）がある。地域の病院は精神科医が少なく、6 か月待たないと診てもらえないため、大学に雇い、確保する必要があるという。

8、9 月は秋学期開始前であり、日本では 2、3 月頃の業務を行っていると考えるとイメージしやすい。看護職や学生健康保険の担当者は、これから入学してくる学生の手続きで忙しく、留学生の予防接種のことが話題になっていた。Nurse Practitioner の方に、これから学生との面接があるので観察することが役にたつなら学生が了承したら同席してはと声をかけてもらい、観察することができた。Confidentiality Statement（守秘義務に関する文書）にサインをしたので詳細は記載しないが、後述するカウンセリングセンター（CAPS）からの紹介で、CAPS とは日常的に連携が行われているようだった。SHS 内でも月に 2 回内科医、精神科医、Nurse Practitioner でミーティングをしている。看護職にはそれぞれ専門性があり、travel medicine（渡航医学：海外旅行者を対象とした健康問題の予防や治療）に詳しい人が多いとのことである。

SHS の PAW が行う Workshop（グループ教育プログラム）の内容は、アドボカシー（人権擁護）、暴力、アルコール・薬物、性教育などで、筆者らが学生支援プログラムで行っているものとはずいぶん異なる。暴力の傍観者への教育プログラムもある。アメリカには寄付の文化があるため、SHS は市民からの寄付金を受けており、最も寄付金が多いのが暴力等の予防に関することで、年々活動が発展しているという。暴力には性的暴行も含まれ、アメリカでは大きな問題であるため、2、3 年前に性的暴行、嫌がらせ等を経験した学生等に対して大学が支援をすることが国の法律で義務付けられたそうである。SARC は法律に対応する形でできた

図 3　受付・ナースステーション（SHS・2 階）

図 4　視力検査器（SHS・2 階）

図 5　研修室（SHS・3 階）

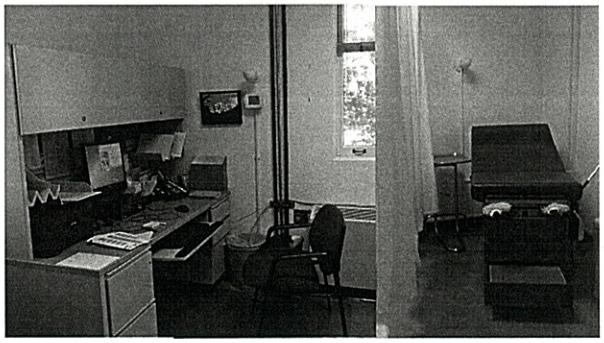

図 6　研究室兼処置室（SHS・3 階）

もので、心理学者のカウンセラーが守秘義務をもって被害者の危機状態を落ち着かせ（crisis stabilization)、心理教育、支持的カウンセリング、およびリソースへの紹介を行っている。

9月16日、17日にはSHSのスタッフ全員を集めた2日間の研修が行われた。日本では新年度開始直前の研修と考えるとイメージしやすいだろう。非常勤のスタッフもいるし、人の入れ替わりも頻繁にあるようなので、久しぶりに会うスタッフ同士が話を楽しんでいる様子が見られた。事前調査でスタッフが100人というのが信じられなかったが、実際100人近く集まっていて、本当だったのだと驚いた。秘書の方は全員名前と顔が一致するそうである。研修はJenniferさんが秘書らと相談して企画し、100人が入る学内のHall（広い部屋）を予約し、学内外から講師を招いた一大イベントだった。1日目はExcecutive DirectorであるJenniferさんがOSUのミッションやDivision of Student Affairs（学生部）のミッション、SHSに求められていることなどを話すことから始まり、副学長が短時間コメントし、人種差別に関する招聘講演やグループワークが行われた。キャンパスで銃撃事件が起こった場合の対応についてのビデオ鑑賞もあった。2日目は6つのグループに分かれて、グループごとに研修を回った。結核の学生が来た場合の対応、インフルエンザの予防接種、消火器の使い方の練習、地震が起きたときの行動の確認、緊急連絡先の確認などである。Excecutive Directorの存在意義を強く感じた研修であった。

5．Counseling And Psychological Services (CAPS)

SHSはCounseling And Psychological Services（CAPS≒カウンセリングセンター）とDixon Recreation Center（Dixon≒リクリエーションセンター）と連携・協力している（Health and Wellness Alignment)。まず、CAPSの紹介をする。面接室等の施設はこれまで紹介されたアメリカの他大学のものと似ている印象を受けた（図7～10）[3,4]。受付から見えるところに様々な言語で「Welcome」が書かれていて、日本語の「ようこそ」もあった。カウンセラーは20人以上いて、アメリカ以外に、日本、インド、ベトナムなど、多様な国籍のカウンセラーで構成されており、グローバルな雰囲気であった。アニマルセラピーの犬が廊下を歩いていたのと（図9)、Mind Spaというリラクセーションスペースが印象に残った（図10)。Mind Spaではマッサージチェアや、バイオフィードバック、セラピーライトなどを使ってセルフケアができるようになっている。CAPSはカウンセラーのトレーニングセンターにもなっているので、博士課程5年のインターンが1人、2、3年のトレーニング中の学生が2人いるという。受付スタッフは職員で、心理学の専門家ではないが、守秘義務についての研修を修めている。

CAPSでミーティングの時間を設定してくれて、面接の合間に来られるカウンセラーが7、8名集まってくれた。アメリカでは大学での銃襲撃事件が起こった後、メンタルヘルスに関心が向くようになったそうである。CAPSで行っているサービス内容として、individual（個人面接)、monthly group（毎月のグループプログラム)、outreach（アウトリーチ)、gate keeper program（自殺予防のゲートキーパー研修）などがあり、ヘルスリスクのある学生（約6%）にメールを送ったりもしているそうである。相談が多いので、individualについて10回というリミットを設けたが、深刻なケースは回数制限の例外としている。また、individualの後グループを勧めている。筆者の大学では就職支援室との連携もあるので質問してみたが、Career Centerとはあまり連携していない、精神的問題が複雑で深刻なので、そちらに手をとられているとのことであった。アメリカでは授業料やHealth Feeを払っている間でないとカウンセリング等のサービスも受けられないが、日本では授業料ではなく、在籍していれば夏休み中も休学

中もカウンセリングが受けられると伝えると、「日本ではカウンセラーの数も少ないのに、いったいどうやっているのかまったく想像できない」と言われてしまった。

図7　Counseling&Psychological Services (CAPS)受付

図8　CAPS受付にあるパンフレットとCoリスト

図9　CAPS廊下（アニマルセラピーの犬）

図10　CAPS　Mind Spa

留学生が病気かどうか、アセスメントをすることは難しい、その学生の国のCultureについての理解が必要だと話したカウンセラーもいた。日本人留学生で、授業に出てこず、アパートでゲームばかりやっている学生がいるらしく、日本の学生相談にはそのようなケースがたくさんあるが、依存症や社会不安障害なのかとアセスメントに困っているようだった。

6. Dixon Recreation Center (Dixon)

Dixonにはsatellite clinicがあり、SHSの理学療法士、カイロプラクティック、栄養士らの部屋や運動指導の場があることもあり（図11)、SHSとDixonも常に連携していると考えてよいだろう。

図11　Dixon　運動指導の場

図12　Dixon　ボルダリング場

図13　Dixon　栄養指導の備品

学生だけでなく職員、また、一般人も使用料を払って利用できる施設であり、学内にあるジムである。アメリカの他大学同様、大きな建物に、プール、バスケットボールのコートなどがたくさんあり、セルフで使えるマシンが何十も並んでいる部屋があった。筆者が見学したときは新たにボルダリング場を作っているところだった（図 12)。

管理栄養士と Dixon で情報交換をしたとき、栄養指導の備品を見つけ、日本と同じようなものを使っているのだと思った（図 13)。学生支援プログラムのスープ試食会のことを写真を見せながら説明したところ [4]、すごくよいアイデアだ、取り入れたいと評価された。その流れで、調査のお礼も兼ねて、9 月 14 日に SHS でスタッフにスープをふるまうことになった。日本にいる高信管理栄養士にメールで連絡をとり、入手できる野菜や材料、調理器具を伝えて相談しながら、OSU の管理栄養士の Amy さんにレシピ作成を手伝ってもらった。当日多くのスタッフや学生スタッフが集まり、豚汁（Pork Miso Soup）の試食を楽しんだ（図 5)。

7. Disability Access Services (DAS)

SHS のスタッフから DAS との連携の話はあまり出なかったが、日本でトピックとなっている障害学生支援についてアメリカの大学の現状を知りたかったので、DAS に施設見学とインタビューを依頼した。建物が離れていたので、DAS の担当者が SHS までわざわざ歩いて迎えに来てくれた(図 14)。

DAS の Director に、reasonable accommodation（合理的配慮）とは何かとたずねたところ、「accommodation を define（定義）することは難しい。学生によるし、状態によるし、クラスによる。」と言われた。アメリカでも 25 年前は教職員に accommodation という概念から説明し、配慮の必要性について教育しなければならなかったのでとても大変だったという。ただ、現在はシステム化されているのでたいていは難しくない。accommodation を受けるには、diagnosis（診断）

図 14　Disability Access Services(DAS)入口

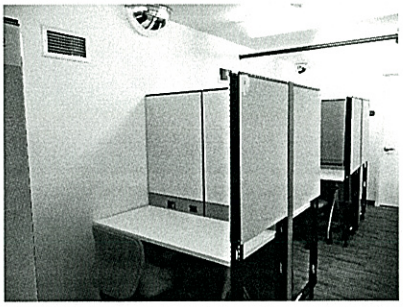

図 15　Testing Center の一室

がいるのではなく、impact（障害が学習面に与える影響）についての説明（根拠）が必要である。配慮の多くは①時間の延長と②ノートテイキングである。stigma（社会的な不名誉）があり、配慮を求めない学生もいるが、DAS に配慮を求めに来ている学生は 85%は卒業できていて、かなりうまくいっているそうである。卒業できなかった学生の退学理由の多くは、mental ではなく medical condition の悪化だと話していた。

Testing Center（テストセンター）という別の建物にも移動し、担当の方からお話を聞いた(図 15)。Testing Center は、試験の accommodation を受けることになった学生が試験を受ける場所である。以前は図書館の中のラーニングスペースでしていたそうである。個別に配慮された部屋、PC が用意してある部屋、視覚障害のために拡大機がある部屋などたくさんの部屋があった。文章を読み上げてくれるソフト、どこを読んでいるかマークが出てくるソフトなども実際に見せてもらった。予定されていても時間に来ない学生もいるかと質問したところ、そういうこともある、合理的配慮を使うかどうかはオプションなので、来なかったということを教員に報告するだけだとの回答であった。

8．おわりに

Jennifer さんはキャンパス内だけでなく、Newport にある Hatfield Marine Science Center（HMSC：ハットフィールド海洋科学センター）にも自ら運転して連れて行ってくれた。HMSC は 7 つの OSU カレッジ、6 つの州と連邦機関との共同研究等を行っている研究機関であるが、ここに 2011 年 3 月に起こった東日本大震災で日本からオレゴン州に流れついた建物の一部が展示されていて驚いた。福島の魚は安全であることをデータに基づいて説明したポスターもあり、ありがたい気持ちになった（図 16、17）。

筆者は OSU の保健管理施設に籍を置いて、連携しているカウンセリングセンター、リクリエーションセンター、障害学生支援センターなど、さまざまな組織を訪問し、学生支援サービスについて幅広く調査をすることができた。OSU ではあたたかく迎えてもらい、楽しい時間を過ごすことができた。

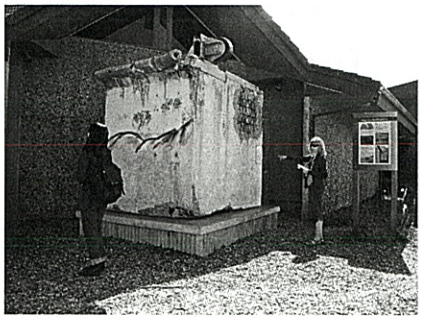

図 16　HMSC　日本から流れ着いたコンクリート

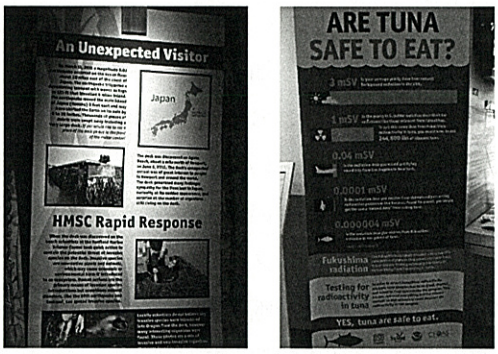

図 17　HMSC　東日本大震災に関するポスター

引用文献

1) ”Student Health Services Oregon State University” <http://studenthealth.oregonstate.edu/>（2017/1/28 アクセス）
2) 山本眞由美. 南フロリダ大学の Studnt Health Service（保健管理センター）と The Counseling Center（カウンセリングセンター）を視察して. Campus Health, 2011；48(2):231-236.
3) 高石恭子. アメリカの学生相談と障害学生支援－カリフォルニア州立ソノマ大学およびサンタローザ市リハビリテーション局訪問調査より－. 甲南大学学生相談室紀要, 2015；23:42-55.
4) 高信雅子.「心と体の育成による成長支援プログラム」における食育の実践－大学生に対する食育の試み－. 金沢大学保健管理センター年報・紀要, 2011；94-96.